

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

8

2018

特集 すくくと、農業参入新時代



特集

すくくと、農業参入新時代

3 農業から生まれる効用を本業に取り込む

渋谷 往男

農業参入は赤字リスクが高いといわれるが、本日まで参入企業は増え続けている。参入企業が期待する効用と、農業参入の成功条件とは

7 農業参入企業の誘致に自治体の期待

村田 泰夫

新規で農業参入する企業を積極的に誘致すべく、独自の支援策を掲げる地方自治体が増えつつある。大分・熊本両県の誘致の取り組みを検証する

11 未知の領域の農業界へ新規参入企業

小澤 弘教

農業と全く接点ない大阪のゴムメーカーが、鳥根県鹿足郡吉賀町で農業に参入した。参入企業と迎える自治体、それぞれの思惑をレポートしてもらった

情報戦略レポート

15 IT活用でスマート農業化 その先に出口はあるのか

—統計と調査から見えた農業の成長性と課題—

経営紹介

経営紹介

23 株式会社勝栄／山梨県 中村 努

Uターン農業者は趣味を昇華させ、肉用鶏、採卵鶏の多品種生産を開始。飼料、水、環境、食鳥処理にこだわり食味を追求、高収益を実現する

変革は人にあり

27 農事組合法人 北辰農産／石川県 舘 喜洋

米の加工品販売に独自の販売戦略を実践、「目指せ百年ブランド」をキーワードに「稲は舎」ブランドを立ち上げた。モノづくりで商品価値とブランド力を高める若き経営者

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：菊地 晴夫
北海道富良野市東山
2017年8月16日撮影

棒積みの青エンドウ豆

■ 広大なほ場には棒積みが直線に並ぶ。収穫した青エンドウ豆を天日干しするため、枝ごと積み上げ雨避けのシートをかぶせて作る棒積みは、この時期の富良野の風物詩だ ■

シリーズ・その他

観天望気

なりわいを継ぐ 筒井 一伸 2

農と食の邂逅

中井 結未衣／千葉県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

至福の一杯 増田 恵子 22

主張・多論百出

技術士(農業部門) 鈴木 善人 25

耳よりな話 196回

緑肥を科学する 大谷 卓 30

まちづくりむらづくり

アスリートが「農」兼業で地域を活かす

ハンドボールチーム、就農三年目の確信

一般社団法人フレッサ福岡／福岡県糸島市

前川 健太 31

書評

小島 希世子 著

『ホームレス農園』

命をつなぐ「農」を作る! 若き女性起業家の挑戦

青木 宏高 34

インフォメーション

交差点 タイ最大級の食品見本市「THAIFEX」に

初出展 前橋支店 35

認定農業者の皆さまへ 36

編集後記 37

ご案内

第13回アグリフードEXPO東京2018 38

9月号予告

特集は「漁業の成長産業化に向けた技術力」を予定。「農林水産業・地域の活力創造プラン」(2018年6月改訂)に「水産政策の改革について」が盛り込まれた。改革の具体的内容には、新たな技術導入が必要とされている。漁船、養殖、流通、それぞれの分野における最新技術導入の動きを追う。

望観天 気天

なりわいを継ぐ

同じムラに長いこと通っていると、なじみの集落の商店が豊まれていたという経験を最近よくする。「スーパーに客を取られたんだなあ」と思っていたが、それは早とちりらしい。話を聞くと、店番をしていたおばあさんが高齢者施設に入り、後を継ぐ人がいないという。ニーズはあるのに店を畳むのはもったいない、そう思う地域の人たちとよく出会う。

都市も人材不足だが、農山村は後継者不足がより深刻である。農業に限らず、生活を支える地域の商店や地域活性化の一翼を担う体験施設などが、事業としての可能性を残しているにもかかわらず、廃業に追い込まれている。政府は事業承継や第三者農業経営継承といった制度で後継者探しを後押ししているが、マッチングはどうするか、「家業」を第三者に譲る決心をどうしてもらうか、後継者候補はどこにいるのか、など現場での課題は多い。

また、都市から農山村への移住希望者は増加の一途であるが、一方で移住先での生活の糧を見いだせず、移住を断念する例もある。この二つの課題から私たちが着想したのが、移住者を後継者とする農山村における「継業」である。

「継業」とは造語だが、事業の後継ぎづくりだけを指すものではない。農山村への移住者は職住分離という都市型ライフスタイルではなく、職住近接という農山村的なライフスタイルを求める傾向があるため、事業の引き継ぎだけを強調しても響かない。農山村ならではの地域性が示されることが肝要である。例えば、第一次産業や生活を支える商店など地域に根差した「なりわい」であることや、職住近接など農山村ならではのライフスタイル、そして地域コミュニティによるさまざまなサポートなど、継業には「地域」という言葉でくくれる仕掛けが必要である。

今年度から、農山村への人材流入を支える総務省の地域おこし協力隊と、経済産業省などによる事業承継ネットワークを組み合わせた新たな試みが始まった。移住者や協力隊員が単なる事業の担い手ではなく、農山村での生活者であることも意識して展開してほしいものである。



鳥取大学地域学部 教授

筒井 一伸

つつい かずのぶ

1974年佐賀県生まれ、東京都育ち。98年鳥根大学法文学部法学科卒業。2004年大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了後、鳥取大学地域学部講師および准教授を経て現職。専門は農村地理学・地域経済論。主な著書に『移住者の地域起業による農山村再生』（2014年、筑波書房）、『田園回帰の過去・現在・未来』（2016年、農文協）、『移住者による継業』（2018年、筑波書房）など。

バラを、クレオパトラは
薬に使っていたそうです
花の力を知りたい人
まだ、知らない人に
伝えていきたいです

農と食
の邂逅

中井 結未 さん

千葉県館山市

ナカイローズファーム・株式会社バラの学校
代表取締役

バラの若葉を使うローズリーフのお茶、ローズコンフィチュールにはバラの花びらをあしらわせて芳醇な香りを漂わせる。OLを経て、プリザーブドフラワーの先駆者として起業。食用バラ栽培を中心に花の女性伝道師。





P19:結末衣さんの好きなバラの品種は「イヴピアッチェ」。食用向きで、濃いピンク色が気に入る。食用バラは、香りや食べ応えを感じる花びらの厚み、苦みのなさなどが求められると言う P20:講演依頼も多く、「女性と農業」をテーマに、起業から現在までのストーリーを高校生に話すことも(右) 結末衣さんとスタッフ5人で管理するバラ園はオーナー制を導入。自らのバラで香水を作り、女性に贈る男性会員もいるそう(左上) 鮮やかな赤色で大輪の「ダブルリネイ」(左下右) 加工品は味・パッケージともに洗練されている(左下左)

友人の言葉で花に目覚める

館山市の市街地を抜け、山道をしばらく車で走ると、バラ園と木造の建物が現れる。食用バラの栽培方法や香水づくりなどを教える「バラの学校」。花や葉を使ったお茶やコンフィチュールなど加工品の製造販売も行う。中井結末衣さん(五〇歳)はなぜここに来たのか。どのような熱い想いを抱いて移住してきたのだろうか。

兵庫県生まれの結末衣さんは一九八五年に京都府にある大学に入学した。男女雇用機会均等法が施行された年で、当時、企業における女性の多くは男性の補助的な存在だった。結末衣さんの研究テーマは「働きたい女性が働ける社会とはどんな社会か」で、「在学中に明確な答えを出すところまではいかなかった。もやもやした思いは残りました」と言う。それでも答えを探ろうと、大学で学びながら簿記専門学校に通い、卒業後は公認会計士の事務所に勤め、その後、不動産会社で経理の仕事に就いた。仕事には真摯に向き合ったが、心が満たされるころまではいかなかった。

人生を変えたいきっかけは友人のある一言だ。家に遊びに来た友人から「花とか飾ってないのね」と言われた。「確かに」と、結末衣さんは気が付いた。自分の母親は常に花を飾り、庭を小まめに手入れしていた。そんな母を見て結末衣さん自身「花屋さんになりたい」という想いを抱いた時期もあった。

「母は生け花など和ものが好きでしたが、私は西洋風の花がいい」。突き動かされるようにフラワーアレンジメントスクールの門をたたいた。「二〇人ほどの生徒のうち私は下手な方。花材を家に持ち帰り、生け直す日々でした。でもはまってしまった」。家に持ち帰る花材が増えるのと、知り合いのバーのマスターに頼んで、店内に飾らせてもらった。その花を見たバーのお客さんから「うちにも飾って」と頼まれるようになった。

女性の起業を支援

花ビジネスを本格的に始めたのは、生花に保存液と着色料を吸わせ、乾燥させると一〇年ほど変わらぬ状態で楽しめるプリザーブドフラワーと出合ってから。自ら加工技術を習得し、二〇〇〇年にホームページを立ち上げてプリザーブドフラワーのアレンジメントのネット販売を始めた。「二カ月間は注文ゼロ。システム上の問題で注文が来ないのかと、自らネットで注文したぐらいです(笑)」

やがて、年に一〇件程度の注文が入るようになった。そんな折、大手通販企業から二万個という大口注文が入った。「先方ができるはずと発注してくれたのだから、できないわけがない」。結末衣さんに経営者魂が宿った。フラワースクール時代の友人に声を掛け仕事を手分けし、見事に二万個分の注文に応じた。当時はまだ、プリザーブドフラワーの認知度が低く、「思っていた花の色と違う」と言われたり、軽いため箱の中で転

がってしまった流通の問題も発生した。一つ一つ原因を探っては改善していった。

花ビジネスを始めた頃、結末衣さんは結婚した。その後、事業の拠点を東京に移した夫と共に上京した。しばらく専業主婦に徹したが、やがて、プリザーブドフラワーのネット販売事業を再開。その頃に届いた友人からの



ポニーの「SORA」。バラには馬の堆肥が効果が高いと聞き、移住してから飼い始めた。毎日、結末衣さんやスタッフが散歩をさせている

年賀状の文面が結末衣さんの頭から離れなかった。「子どもができてお花をやめました」「介護が始まって花を中断した」と書かれていた。「でも私は仕事を続けている。それはネットを使い、在宅でやっているからかもしれない。私のやり方をみんなに伝えれば仕事を続ける女性が出てくるかも」

大学時代には答えが出なかった「働きたい女性が働ける社会」に、結末衣さんは自らの経験を重ね合わせ、花で起業を目指す女性のための教室を開校した。カリキュラムは、ホームページの作り方、業者との商談時の交渉術、クレーム対応などで、自ら経験したことを余すところなく伝えた。東京の一等地である表参道に店を構え、教室と花の販売で事業を拡大した。そんな結末衣さんが館山市に拠点を移したのは、二〇一二年三月の東日本大震災が大きな契機となった。

生産から始める決心

震災後、結末衣さんは「何か私にできることはないか」をひたすら考え、ありったけのプリザーブドフラワーを抱えて被災地を訪れた。すると、仮設住宅に暮らす人たちは歓迎してくれるばかりか、思いがけない言葉をかけてくれた。「寒いのによく来てくれたね」「待っていたよ」。家をなくし、仕事をなくした人たちがそれでもなお他人をおもんばかる姿にふれ、「日本人を見たという気がした。出会った人たちが発する言葉、たまたまにオーラを感じました」と話す。

言葉を交わした人は一次産業に携わる人が多く、「花を作るためにはまず土づくりが大事」という菊の農家とも交流を重ねた。「私は、花をやらなければと思いました。育てるところからやってみようと。花の力を知りたい人、まだ知らない人に伝えていきたい」

被災地への訪問を続けながら、移住先を探

し、一年かけて館山市への移住を決心。家庭を守ってくれることを望んでいた夫とは別の道を歩むことにした。新天地では、プリザーブドフラワーの中で代表的な花であるバラ、しかも無農薬の食用バラに特化した。「バラはクレオパトラが薬として使ったことは知られていましたし、無農薬栽培で生産する意味が伝わりやすかったです」

館山市に住んで六年が過ぎた。定期的に開く教室には都心からも受講生が訪れる。一年前から食品製造も始めた。バラの若葉を使ったローズリーフティーは、ほっと落ち着く味であり、バラの学校にしかない商品だ。コンフィチュールは花弁が入っており、芳醇な香りが漂う。

バラの生産量を増やすため、花き栽培に最適な気象条件を備えた鹿児島県さつま町にも一五〇〇坪の園地を確保した。日々の作業は現場スタッフに任せているが、結末衣さんも定期的に訪れ、管理をする。生産に力を注ぐため、縮小した東京での事業は別の形で受け継がれている。起業教室に通った一五人の女性が、ネットでプリザーブドフラワーを販売したり、起業を目指す人のための教室を開いている。

人に何かを伝えていく使命を担っている人は、本人も周りの人から勇氣や刺激を敏感に受け取る。それを再び周りの人に注いでいく。そうした循環の中に結末衣さんはこれまでも、これからも居続けるだろう。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

Forum Essay

フォーラムエッセイ

静岡から上京して四二年！すっかり東京人になりましたが、時がたつにつれ、故郷に想いをよせることが多くなった今日こんにちです。

世界遺産認定の富士山に抱かれて育った幼き頃。温暖な気候に恵まれておいしい水と豊かな農作物。お茶や山ワサビ、みかんに久能のイチゴ、はたまたメロンや山菜、そして忘れてはならない新鮮なお魚たち。なんと食に恵まれた成長期だったことか。今さらながら心から感謝です。あっぱれわが故郷！

中学時代の友からは、今も静岡のおいしいものが送られてきます。そして私は、本川根町（現在の静岡県榛原郡川根本町）にある親友の旦那さまの実家から何十年もお茶を取り寄せています。というのは、どうしてもこのお茶でないと一日が始まらないからです。

おいしいお茶の煎れ方にもこだわっています。まず、心のゆとりと愛情が大事。そして、おいしく煎れたいと思う集中力が欠かせません。煎れている途中でインターホンが鳴っても無視します。急須に茶さじ二杯強のお茶葉を入れて、八五度のお湯を注ぎ、四五秒ほど蒸らします。蒸らす間に湯呑みと梅干しをセット。そして、ゆっくり少しずつ注ぎます。深く呼吸をしながら、やさしい気持ちで穏やかに……。すると、美しい緑色の、甘さと渋さのバランスが絶妙なお茶が、よい香りを漂わせてくれます。

急須の形も大切です。私が愛用しているのは、やや厚めで丸みを帯びた有田焼のもの。この急須と出会ったのは一六年前で、他のものは使えないほど手になじんでいたもので、一度割ってしまったときは相当落ち込みました。どうしても同じ急須が欲しくて、無理を言っただけで焼いてもらったほどです。しかも三個！（うち二個はストック用として、何かあったときのために置いてあります）

都会にはおしゃれなレストランが数多くあり、主人や友達と外食もします。おいしいものと出会おうと、作り方を聞いて家でも試してみます。でもそれ以上においしいと思えるもの、それは自分で握ったおにぎりや自家製のぬか漬け、そして自分で入れたお茶です！見た目は地味だけど、私はどこに行くにもこの何よりぜいたくなお弁当を持参で、心も体も潤っています。



歌手
増田 恵子

ますだ けいこ
1957年静岡県生まれ。76年にピンク・レディーとして「ペッパー警部」でデビュー。81年に解散。その年、中島みゆき作詞作曲の「すずめ」でソロデビューし、40万枚の大ヒットを記録。2010年には、「解散やめ!」を宣言し、今なおピンク・レディーとして活動中。17年11月には、完全セルフプロデュースによるソロライブ「増田恵子〜60 Candles (キャンドルス)」を開催。今年2月には13年ぶりのシングル「最後の恋/富士山だ」をリリースし、精力的に活動している。

至福の一杯

技術士（農業部門）

鈴木善人

（五〇歳）



●すずきよしひと●
農業コンサルティング業を営む株式会社リ
ブスを二〇〇三年に創業。その後、北海道大
学発ベンチャー企業として農作業の軽労化
に取り組む株式会社スマートサポートを設
立。食、農業、環境、健康をテーマにした多様
なネットワークを形成する一般社団法人Eto
Farm Care代表理事。地理的表示保護制度
（GI）統括アドバイザー（北海道）。

現

在、日本では、耕作放棄地が増え続けている。農地として効率的な運用が難しい中山間地はともかく、平場の好条件な農地に担い手がない、あるいは農地法などのルールから新たな担い手が参入できないという理由で何年も耕作されていないといった農地が多く存在している。これらのことは、産業としての農業を衰退させることを意味する。

家族を中心とした伝統的な農業や農的ライフスタイルを否定するつもりは全くない。ただ、日本農業を衰退させないためには、農地を集約的かつ効率的に管理し生産性を上げることができ、「経営力のある農業経営者」を多く輩出させる必要があると考えている。

農地の適正運用が優先されるべきであり、経営力ある農業経営者が担い手となるべきだ。農地や作業機械、労働者など経営資源をその経営者の下に集め、IoTなどの最新技術を駆使して管理することで、農地利用率や経営効率を高める余地は大きいと思われる。

経営力のある農業経営者が組合員となれば地域の

農協の存在意義も変化せざるを得なくなるだろう。農産物はその土地の気候や土壌など「風土」に依存しているため、優れた特性を持つ農産物（特産品）は、地域の共有財産である。産地間競争力に勝ち抜くため、「地域が一丸となって」この共有財産に付加価値を付けること、すなわちブランドコントロールも地域の農協の重要な仕事になるだろう。地域全体の生産性を上げるために個々の農業経営者の経営支援と販売力強化の利害調整を組織的に実施し、組合員の求心力を集めるために専門的な知識を有し、信頼される農協職員を育てるだろう。このように波及していき、結果的に農村地域に大きな利益をもたらす。

経営力のある農業経営者を増やすためには、既存の農業者の意識改革と、企業を含めた農業外からの参入障壁を下げ、経営力のある多様な担い手を増やすことが重要だ。

私は、農業コンサルティングが主たる事業の会社を創業して、今年で二五年になる。この間、農業者に会っ

て「農業コンサルタントです」と名乗ると、多くは警戒し、げんな目を向ける。サラリーマンを経ての起業で、駆け出しの頃は、「農家でもなくせに分かったよいうな口を利くな!」と叱られたこともあった。わざわざ民間の事業者が提供する情報にお金を払う必要なんてないと考える農業者もいた。

農業者の経営、技術の指導は官が主導的に行うことが当然とされていて、公務員である農業改良普及員が無償(税金)で技術指導を行い、農協が生産物を全て買い取ってくれる。収入が足りなければ、補給金や共済金で補填される。経営に関しての裁量はほとんどなく、言われたこと(指導されたこと)だけをしっかりやっていけばなんとかなる。自分で決めることがないので経営責任を問われることもない。もし、うまくいかなければ農政や農協、あるいは資材屋の営業が悪い、結果が出ないと「騙された!」と他人に責任を押し付ける。

経 営者の視点で考えれば、だまされた結果も自己責任であって、他人に転嫁すべきではないし、コンサルティング業を名乗る人たちを十把一からげに詐欺師のように扱う態度も大人げない。このような、結果に対して責任を取らない「農業経営者」は、単

に作業者、労働者と呼べるのではないだろうか。これまでは従順な労働者として振る舞うことを求められていたということだろう。意識を改革し官主導の、裁量がない従順な労働者からの脱却が必要だ。

農業者の意識改革と、農業参入で経営力のある多様な担い手を増やすに当たりデンマークの例が参考になる。デンマークでは農場の譲渡は親子間であっても有償という慣習から意欲的で優秀な経営者に農地は集約され、農場規模は拡大している。さらに二〇一五年に制定された新農業法では、株式会社に加え、投資財団、年金基金、生命保険会社などのほか、国や地方自治体等も農地を所有できるようになった。これにより、自作農主義は堅持しつつも、資本と経営、労働の分離は進み、農業者には、より優れた経営能力が求められるようになっていく。

わが国では、基幹的農業従事者数のわずか二〇%にすぎない若手農業者(四九歳以下)が世代交代し、日本農業を担う日が来るのはそう遠くはない。若手農業者、新規就農を志す意欲的な者などが、経営力を付け、生産性の高い農業に挑戦することができるような環境をオールジャパンで整備していかなければならない。

「経営力ある農業経営者」が今こそ必要 意欲的な担い手輩出のシステムを構築!!

F

緑肥を科学する

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業研究センター 土壌肥料研究領域長

大谷 卓

緑

肥とは、植物を収穫せずに耕地にすき込
み次作物の肥料とする技術や、そのため
の植物を指します。具体的には、欧米のクロ
バーや日本の水田のレンゲなどが有名です。

マメ科緑肥は、生育中に固定した窒素を土壌
に供給し、後作物の窒素源となります。しかし、
窒素肥料の工業的製造法が確立し、安価な化学
合成肥料が供給されるようになると、それ自体
に換金性がない緑肥への関心は低下し、現行で
は広く定着した技術とはなっていません。

一方、最近の農業の
状況を見ると、営農の
大規模化や水田の畑地
化が進行し、堆肥施用
や深耕といった土づく
りがおろそかになるだ
けでなく、畑地化によ
る土壌炭素の減耗など、
土壌肥料的に懸念すべ
き方向にあります。

農

研機構では、農
水省委託プロジェクト「生産コストの削
減に向けた有機質資材の活用技術の開発（平成
二七〜三二年度）」で、緑肥のさまざまな機能と
土壌改善効果の解明に関する研究に取り組ん
でいます。その結果、緑肥には三つのメリットが
あることが分かりました。

まず、土壌の「化学性」について。緑肥は、マメ
科の窒素固定能活用の他に、前作で吸い残した
窒素・カリを地下水に流亡する前に吸い上げ、
次作に供給する機能があります。リン酸・カリ

比率や塩類濃度が高い家畜ふん堆肥に比べて
養分バランスが良く、優位性がありそうです。

次に、土壌の「物理性」について。緑肥には作
土の有機物を増やす効果があり、現在、土壌炭
素貯留効果が牛ふん堆肥何十分に相当するの
かを検討しています。また、緑肥の根伸長によ
る下層土の物理性改善として、緑肥後作物の根
伸長促進、土壌透水性などの改善効果を評価し
ています。



緑肥(ソルガム)の栽培(上)とすき込み(下)

最後に、土壌の「生物性」について。緑肥はエサ

としての新鮮有機物の
給源となり、土壌微生物
が増加します。作物が吸
収しにくい難溶性リン
溶解菌の増加、有機態リ
ンを作物が吸収しやす
い無機態に分解する土
壌酵素(ホスファター
ゼ)活性の向上、作物に
共生してリン吸収を増
やすアーバスキュラー

菌根菌の増殖などの効果も確認されています。

緑肥栽培は、ある意味「一作分の収益を犠牲
にする」ため、休閑期の導入が現実的です。しか
し、「持続的生産を可能とする土づくり」という
長期的な視野で見ると、緑肥作物を作付け体系
に導入することで、化学性・物理性・生物性の総
合的な土壌改善効果が期待でき、しかも経済的
メリットもあるのではないかと考えています。
堆肥施用や機械深耕に負けない緑肥の存在意
義にご注目ください。

F



Profile

おおたに たかし
1959年栃木県生まれ。東北大学理学部化学科卒業。
87年農林水産省に入省し、農業環境技術研究所に
配属。農林水産技術会議事務局、高度解析センター
などを経て、2017年から現職。農学博士。専門は、
化学物質の環境中での動態および植物吸収に関する研究。



アスリートが「農」兼業で地域を活かす ハンドボールチーム、就農二年目の確信

福岡県糸島市

一般社団法人フレッサ福岡代表

前川 健太

昼は農業、夜はハンドボーラー

福岡県の西端に位置する糸島市。福岡市中心部から車でわずか四〇分ほどに位置しながらも、海山など多くの自然に囲まれた風光明媚な町です。

この町で私たちのハンドボールチーム・フレッサ福岡が生まれたのは二〇一六年四月。全国から三〇人近い受験生が集まり、一〇名の合格者と共にフレッサ福岡の活動はスタートしました。

私たちの基本コンセプトは「アスリート×農業で地域に夢と元気と活力を！」です。選手たちは、昼間は農業に従事し、夕方から近隣の体育館でハンドボールをするという、これまでの実業団とは一線を画す形で農業とスポーツに取り組んでいます。

チーム名の「フレッサ」とは、スペイン語でイチゴの意味。「フレッサ」の語源は、フリックという北欧神話に登場する豊穡の女神だそうです。選手たちは福岡特産のイチゴ「あまおう」栽培を中心に、

露地でレタスやタマネギ、施設園芸でミニトマトやマンゴーなどの栽培に取り組んでいます。

「なぜスポーツ選手が農業を？」と思われるでしょうが、その話の前に少しだけ、国内のチームスポーツの事情をお話しします。

日本ではいわゆるプロスポーツチームと呼ばれるものは少なく、多くのスポーツは実業団方式やクラブチーム方式で運営されています。ハンドボールも同様で、国内の最高峰リーグは実業団を中心とした構成になっています。

実業団スポーツの問題点として、「企業の業績次第でチームが消滅すること」や「スポーツマンの職業選択の自由度が低い」ことが挙げられます。ハンドボールの世界は最盛期で男女合わせて三〇ほどのチームが存在しましたが、現在は一五チームと半減しています。

有望な選手でも、さらに上のレベルでプレーするための舞台が減っているのです。ハンドボールの競技人口は増えているにもかかわらず、多くの

選手が大学卒業と同時にハンドボールからも卒業するのが現実です。

さらに、アスリートのセカンドキャリアという問題もあります。つまり、実業団チームに所属する選手は、練習時間や試合の遠征などでなかなか本業に専念できないなどの理由から、仕事面でのスキルアップが難しいのです。その結果、選手引退後は企業を離れてしまうアスリートが多いのもまた事実です。

農業ならオンオフ切り換え可

私は高校時代にハンドボールを始め、その後社会人リーグでも活動していました。そこでこのような課題を目的にしておき、社会人のためのハンドボールチームを創ってトップリーグに参入できないだろうかと考えていたのです。そしてたどり着いた答えが、「農業」でした。

アスリートたちには、働きつつプレーをする環境がない。一方で、農業は担い手の減少にあえいで



profile

前川 健太 まえかわ けんた

1978年福岡県市生まれ。97年に福岡県立筑紫丘高校卒業後、福岡県警察で15年間勤務。2015年に福岡市議選に立候補するも落選。高校時代からハンドボールに取り組み、社会人チームを経て、16年に一般社団法人フレッサ福岡を糸島市で設立、代表に就任。スポーツと農業の両面から地域活性に取り組み、フレッサ福岡の日本ハンドボールリーグへの参入を目指す。

フレッサ福岡

2016年1月、一般社団法人フレッサ福岡により創設されたハンドボールチーム。福岡県糸島市を本拠地とする。選手たちはチームが紹介した市内農家で2年間農業研修生としてあまおうなどの生産を学び、夕方以降はハンドボール練習に取り組む。17-18シーズンはチャレンジ・ディビジョンで決勝戦に進み全国2位。今シーズンは九州3位で8月のジャパンオープンハンドボールトーナメントに出場予定。



左上：博多駅の物販催事。選手は糸島市産の加工品もPR 右上：研修先の花農家で収穫 下：2017年の九州クラブ選手権の一コマ

いる。農業の場合、繁忙期はあるものの、栽培品目次第ではオンとオフを切り換えられる。アスリートのセカンドキャリアの問題も解消できるのではないかと。ならばこの二つをマッチングすることはできないものか、と考えたのです。

多くの方に相談した結果、フレッサ福岡が誕生することになりました。糸島の既存農家の方々、新興の農地所有適格法人、行政をはじめ多くの方々と協力しつつ、新たな一歩を踏み出しました。

フレッサ福岡は今年で発足三年目です。選手たちは糸島市内の既存農家で農業研修生という形で二年間の研修を行い、その間は農林水産省からの農業次世代人材投資資金(旧：青年就農給付金)の交付を受けつつ、農業の知識を日々身に付けてきました。この他、フレッサにご支援いただいでい

る農業の法人でのアルバイト収入なども合わせ、選手たちは生計を立てています。

チーム加入が決まった選手たちが糸島市に移住してきた当初、選手たちに「農業の経験はありますか?」と質問をすると、全員が異口同音に「ありません」と答えました。そのとき、地元で研修先として受け入れを承諾してくださった農家の方が「大丈夫?」と心配していたのを今でも覚えています。私は「体力だけではありませんから!」と答えつつも、心の中は不安でいっぱいでした。

トラブル続きの就農初年度

いざ研修が始まってみると、予想以上にトラブル続きでした。まず、農業の現場の言葉を知らない。農業をする上で必須の専門用語が全く理解で

きないのです。さらには、除草剤をまいた後の動力噴霧器を洗浄せずに農薬を散布し、苗を枯らしてしまったり、野菜と雑草を間違えて草むしりしてしまうなど、笑えない日々の連続でした。私の耳に入っただけでもこのような失敗が続いていたのです。おそらく現場では、もっと大変なことが起きていたと思います。

しかしある日、農家の方が「俺たちも、農業始めたばかりの頃は、何も分からなかったから。心配するな」と、選手たちのトラブルを一笑に付して、逆に私を励ましてくれました。しかも、「彼らを見てみると、何らかの化学反応が起きそうな気がする」、「農業をするだけでなく、アスリート×農業というライフスタイルを見せてほしい」とご期待の言葉もいただいたのです。

一方、チームのハンドボールの成績は、結成直後に開催されたクラブチーム参加の福岡県大会で長年王者に君臨していたチームを撃破し、その後の九州・中四国大会で優勝を飾るなど、上々の滑り出しを見せてくれました。二年目には全国大会で準優勝を二度飾るなど、順調に成長を続けています。

ただ、選手たちは農業が終わってから練習をするという、非常にハードなスケジュールをこなします。当然、高いレベルで体のケアや、コンディショニング調整が求められるのです。

一年目の夏の出来事でした。ガラスハウス内での作業中、選手たちが熱中症で次々に倒れてしまいました。

それもそのはず、当の本人たちは水分補給の重要性を理解していたつもりだったのですが、やはりスポーツ根性というのか、少々の疲労くらい大丈夫と無理をしまい、水分補給が足りなかったのです。日中のハウス内の気温は五〇度近くまで上がるため、あつという間に熱中症にかかってしまいました。

連日のように、「倒れた！」という連絡を受けては見舞いに行き、「ちゃんと水分はとってくれよ。休むことも仕事だからね」と選手たちに言い聞かせる日々でした。そんな経験もあってか、二年目からは熱中症になる選手は出ず、むしろ暑さへの抵抗力が強くなくなったように感じました。

面白かったのは、ハウスをのぞくと、随分と厚着をして作業をしている選手がいました。「熱くないの?」と聞くと、「今度の大会が沖縄なので、暑さ対策でわざと厚着をしています。水分補給と

休憩は適宜とっているので大丈夫です」と答えたのです。灼熱のハウス作業もトレーニングに変えてしまうほど、彼らはハンドボールへの情熱にあふれているのです。

二年目、沖縄県での試合では、暑さをものともせずに快進撃を続け、九州大会三位。その後の全国大会では、前述の通り初出場ながら決勝戦まで進み、全国準優勝という栄冠を勝ち取ってくれたのです。

毎年少しずつ選手は増え、入れ替わりも繰り返しながら、現在は一二名の選手がフレッサ福岡に所属をしています。

二足のわらじで地域を活かす

ところで、途中で、やむを得ず退団をした選手がいることもまた事実です。フレッサ福岡の一期生に、かつて実業団チームに所属していた選手がいました。彼はトップリーグでのプレーにこだわりのあり、チームの中心選手でした。フレッサが二年目にトップリーグ参入を延期する決定をしたときに、彼はもともと所属していた実業団に戻ることになったのです。そこで彼が働く場所として選んだのは、チームの所在地である福岡県の種苗農家でした。先日、彼と話をする機会があったので、今の暮らしについて聞いてみると「農繁期と農閑期のメリハリがあるおかげで、練習の緩急もつけやすいですし、練習や遠征にも理解をもらっているのです、非常にいい環境でプレーできています。農業とスポーツは相性いいですよ」と、うれい話をしてくれました。

チームを離れても、「アスリート×農業」を実践

してくれているのだと感慨深いものがありました。そして、自分たちが考えたこの組み合わせに間違いはなかったのだと改めて自信を持ち、この取り組みにさらに向き合おう!と思いました。

誰も挑戦したことのない取り組みだからこそその苦労がある分、楽しさもあります。地域の皆さんとの交流も活発です。保育園や地域の講座でボール遊びを教えるといったスポーツ関連のイベントはもちろん、農家である側面を活かし、アグリフェスタで自分たちが育てたイチゴやミニトマトの物販、JAの田植えイベントに参加など、普通の社会人チーム以上にさまざまな形で関わることができています。物販イベントでは、お客さんから直接「おいしい!」という言葉ももらえることが、選手たちの日々の農作業や練習を支えるモチベーションになっています。

チームでは入会金・年会費無料でファンクラブの会員募集もしています。今後は、応援してくださる方々にハンドボールで感動を見せることに加え、食育や青少年の育成、お年寄りの健康づくり、選手引退後は営農という新しいライフスタイルの創出など、やりたいことは尽きません。

二〇二〇年の東京オリンピックのときには、農業をしながらハンドボールをしている選手がコートに立っているかもしれない。さらには、引退を迎えた選手が、若き農業アスリートを研修生として受け入れ、農業もハンドボールも指導をしてくれる存在になっているかもしれない。

そんな日を夢に見ながら、日々試行錯誤を繰り返しながら過ごしています。フレッサ福岡と選手たちの挑戦はまだまだ始まったばかりです。

『ホームレス農園』

命をつなぐ「農」を作る！ 若き女性起業家の挑戦

小島 希世子 著



(河出書房新社・1,450円 税抜)

農は食と職をつくる

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)
厚生労働省の「ホームレスの実態に関する全国調査」によれば、ホームレス人口は七五〇八人(二〇一四年度)だ。しかし、この人数は「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が定義する屋根のない状態で暮らしている人に限られ、屋根はあるが家がない状態の人は含まれていない。いわゆるネットカフェ難民などで、実態はこの数倍とも言われる。

この本を書いた小島希世子さんは、神奈川県横浜に市民農園を借りて二〇〇八年に家庭菜園塾の『チーム畑』を始めた。野菜作りを体験したい人は多く、農体験教室を週末に行っていたが、参加者の来ない平日の畑の世話のため小島さんはホームレスを雇用する。

これには伏線があり、小島さんが東京で大学生

活を始めた頃、路上に雑誌を並べて売るホームレスのおじさんから「住所も電話番号もない。働かないのでなく、働きたくても働けない」という話を聞いた体験が下地になっている。

ホームレスに「働く場」をつくる活動は、周囲の人には無謀な妄想に見えたようだが、働きたいが仕事も家もない人と、空き家も仕事もある人が足りない農家をつなげば「二石二鳥」である。ホームレスと農業をつなぐ「この道は間違っていない」と、「農」と「職」をつなぐ活動を続ける。

三〇数年前になるが、フリーランスの記者であった友人が「農業をやりたい」と相談してきた。今日とは違い、農地法の問題やよそ者に向けた排他的な農村体質など、容易な時代ではなかった。この本の主人公でもある小島さんは一九七八年生まれ、熊本県の農村地帯で育ち、周囲の友達

は農家の子もなかった。教師だった両親に「なぜ、うちは農家でない？」とか、アフリカの飢餓の子どもたちをテレビ映像で観て、あの国で農業を教えて食べものをつくる食料生産の夢を語るといった、「農」へ夢を抱いていた子供時代だった。

「農」は人々の命の源である「食」を支えるだけでなく、未知の可能性を秘めている。農が「食」と「職」になる「農の未来」である。

それは「農」というフィールドでみんなが生き生きと働ける未来であり、そんな時代の景色を、小島さんは描いている。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年6月1日~6月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 水産小六法 平成30年度改訂版	水産法令研究会／著	水産社	15,000円
2 森づくりの原理・原則 自然法則に学ぶ合理的な森づくり	正木 隆／著	全国林業改良普及協会	2,300円
3 農業と経済 臨時増刊号 (2018年4月) 錯綜するEPA/FTA動向と世界の農業・食料政策	農業と経済 編集委員会／編	昭和田	1,700円
4 日本の農業環境政策 持続的な美しい農業・農村を目指して	荏林 幹太郎、佐々木 宏樹／著	農林統計協会	2,800円
5 週刊ダイヤモンド JAを襲う減反ショック 儲かる農業2018 (2018年2月24日号)	週刊ダイヤモンド／編	ダイヤモンド社	685円
6 新版 農業がわかると社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門	生源寺 眞一／著	家の光協会	1,200円
7 農林水産六法 平成30年版	農林水産法令研究会／編	学陽書房	14,000円
8 そこの聞きたい 山林の相続・登記相談室 (林業改良普及双書 No.188)	鈴木 慎太郎／著	全国林業改良普及協会	1,100円
9 攻めの農林水産業のための知財戦略 食の日本ブランドの確立に向けて	農水知財基本テキスト 編集委員会／編	経済産業調査会	4,900円
10 ITと熟練農家の技で稼ぐAI農業	神成 淳司／著	日経BP社	1,800円

タイ最大級の食品見本市「THAIFEX」に初出展

五月二十九日～六月二日までの五日間、タイのバンコクで開催されたタイ最大級の国際総合食品見本市「THAIFEX2018」に、国産農産物・食品の海外輸出を支援するため、日本公庫農林水産事業は、日本産食材の団体ブースを出展しました。

先五社が、国産の牛乳、牛肉（交雑種、黒毛和牛）、サツマイモ、海産物（珍味）などを出品しました。

昨今の和食ブームもあってか、ジャパン・パビリオンにはタイ国のみならず各国からのバイヤーも多く訪れ、連日、にぎわいを見せていました。

ブースは、日本貿易振興機構（JETRO）が運営する「ジャパン・パビリオン」内に設置され、輸出に取り組み意欲の高い公庫のお取引

出品者は、試食を用意し、生産のこだわりや食べ方を伝えるなど、自慢の商品を全力でバイヤーにP

R。バイヤーの中には、商品のおいしさや品質の高さなどから「すぐにも買わせてほしい」と出品者に要望する人もいました。一方で、引き合いがあっても物流や関税を含めた価格の問題などから商談が成立しないなど輸出ならではの難しさがありました。即売が行われた最終日は、ブースには商品を購入しようとするバイヤーの列ができましたが、牛肉は諸手続きの関係でもともと残念がっていました。

また滞在中、バンコク市街地から少し離れた地域にある日系デパートに出店する「47 Fresh From JAPAN」を視察しました。公庫の輸出支援事業の提携貿易商社、株式会社ライヴスがヤマトグループを始め四社と共同運営する小売店で、季節の果物やトマト、ブロッコリーなど日本産農産物を主に扱っています。同店舗では、調理法のデモンストレーションや試食など、現地プロモーターが対面販売をしていました。スーパーよりも価格帯は高いものの、生産者の「こだわり」を対面で伝えることで、消費者の購買行動につながっているように思いました。

タイ国内では、日本産食材が浸透してきており、農業者・食品企業にとつてのビジネスチャンスが広がっています。「THAIFEX」や「47 Fresh From JAPAN」の様子から、日本産農畜水産物の輸出には、大きな伸び代があると感じました。引き続き、日本公庫は国産農産物・食品の海外輸出を積極的に支援していきます。



上、中：盛況下のうちに幕を閉じた「THAIFEX2018」
下：「47 Fresh From JAPAN」は商品陳列もこだわっている

（THAIFEX2018出展：二五三七社・団体、来場バイヤー：六万二〇三九人（前橋支店 中嶋美峰）

認定農業者の皆さまへ

自主性と創意工夫を活かした 経営改善を応援します

経営改善に取り組む認定農業者の皆さまのさまざまなニーズにお応えします。

■スーパーL資金（農業経営基盤強化資金）

ご利用いただける方	認定農業者（農業経営改善計画を作成して市町村長の認定を受けた個人・法人） ※なお、個人の場合、簿記記帳を行っていること、または今後簿記記帳を行うことが条件となります。	
資金の使いみち	農業経営改善計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	農地など	取得のほか、改良・造成も対象となります。
	施設・機械	農産物の処理加工施設、店舗などの流通販売施設も対象となります。
	果樹・家畜など	購入費、新植・改植費用のほか、育成費も対象となります。
	その他の経営費	規模拡大や設備投資などに伴って必要となる原材料費、人件費などが対象となります。
	経営の安定化	負債の整理（制度資金は除く）などが対象となります。
ご融資条件	法人への出資金	個人が法人に参加するために必要な出資金などの支払いが対象となります。
	融資限度額	【個人】 3億円（特認6億円） 【法人】 10億円（特認20億円） ※このうち経営の安定化のための資金のご融資限度額は個人6,000万円（特認1億2,000万円）、法人2億円（特認4億円）です。
	ご返済期間	25年以内（うち据置期間10年以内）
	利率（年）	期間により異なる利率が適用されます。詳しくはお問い合わせください。
ご留意いただきたい事項	担保・保証人	ご相談の上、決めさせていただきます。
		1. 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 2. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル（0120-154-505）または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。

お問い合わせ先

本店	TEL:0120-926478
札幌支店	TEL:011-251-1261
帯広支店	TEL:0155-27-4011
北見支店	TEL:0157-61-8212
岐阜支店	TEL:058-264-4855
大津支店	TEL:077-525-7195
京都支店	TEL:075-221-2147
大阪支店	TEL:06-6131-0750
神戸支店	TEL:078-362-8451
鳥取支店	TEL:0857-20-2151
松江支店	TEL:0852-26-1133
岡山支店	TEL:086-232-3611
広島支店	TEL:082-249-9152
山口支店	TEL:083-922-2140
徳島支店	TEL:088-656-6880
高松支店	TEL:087-851-2880
松山支店	TEL:089-933-3371
高知支店	TEL:088-825-1091
福岡支店	TEL:092-451-1780
佐賀支店	TEL:0952-27-4120
鹿児島支店	TEL:099-805-0511

「平成30年7月豪雨」により被害を受けた皆さまに対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫農林水産事業では、本災害により被害を受けた北海道、岐阜県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、鹿児島県の一八道府県の農林漁業者などの皆さまを対象とする窓口を設置し、ご相談を受け付けています。ご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細やかな対応を行ってまいります。

編集後記

④ 七月の豪雨で被害に遭われた皆さまにお見舞い申し上げます。

さて、五月に発表されたJALの農業参入に代表されるように、近年、さまざまな業界から農業が注目されています。農業界に多種多様なプレーヤーが増えることは喜ばしい限り。参入企業が新しい風を吹き込んでくれることを期待します。(西山)

④ 「経営紹介」の株式会社勝栄は、以前甲府支店に勤務していた際、お世話になっていた先。今回取材で久しぶりに中村社長にお会いし、以前と全く変わらない鶏に対する熱意に感銘を受けました。ただ残念だったのは、社長が鶏同様に情熱を注がれているサッカーに誌面で触れられなかったこと。ワールドカップの結果以上に、心残りです。(高雄)

④ 「農と食の邂逅」取材に同席しました。取材記者の青山浩子さんはメモはたまにで、中井結未衣さんと終始和やかに話を進めます。中井さんは取材を受け「客観的に自分を振り返り、抱いていた目標と現実の差を認識できた」と、とても喜んでいました。このような「とこととき」に出会えるのは編集者冥利に尽きます。(城間)

④ 「まちづくりむらづくり」のフレッサ福岡。農業の人手不足とアスリートのセカンドキャリアの問題に一石を投じる取り組みです。接点がなさそうな農業とスポーツを結び付けたのは、代表・前川さんの柔軟な発想力！記事では地域との関わりを軸にチームを紹介しています。日々の活動はSNSで前川さんが発信中です。(前島)

AFCフォーラム Forum

■編集

鳴谷 元 西山 大也 高雄 和彦
柴崎 勇太 城間 綾子 前島 幸子
鈴木 晃子

■編集協力

青木 宏高 牧野 義司

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり 農と食 をつなぎます。



第13回 アグリフードEXPO 東京 2018

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月22^水日 / 23^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



すくくと、農業参入新時代



『ジジとぼくとおとうとでおいしそうなやさいをとったよ』甲村 一貴 山口県防府市立牟礼小学校

■ AFCフォーラム 平成30年8月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻5号(816号)
 ■ 発行 / (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■ 販売 / 株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 〒7原ビル Tel.03(3537)1311 ■ 定価514円

【本誌価格476円】

